ISSN 1344-1588

横濱市立大學紀要

THE JOURNAL OF YOKOHAMA CITY UNIVERSITY

March 1999

社会科学系列　第 2 号

ウッチ・ゲットー問題とヘウムノ・ガス自動車
「安楽死」作戦　永　岑　三千輝…… 1

CAD システムと設計の熟練
— 金型製造業におけるバグレポートの分析 —
佐々木　圭　吾……33

配当政策と会計政策決定の分析　中　條　祐　介……57

地方分権と河川管理　島　田　　茂……75

横　浜　市　立　大　学

ウッチ・ゲットー問題とヘウムノ・ガス自動車「安楽死」作戦

永　岑　三千輝

目　次

はじめに
1．ソ連占領地ユダヤ人殺戮の無差別化と「安楽死」技術転用の検討開始
　　－1941年8月中旬－
2．「特殊自動車（ゾンダー・ヴァーゲン）」開発とソ連占領地への投入
　　－配備開始1941年11月末－
3．西ヨーロッパ各地の不穏状態とユダヤ人東方移送への圧力群
4．ヒムラー・ハイドリヒによるライヒ・ユダヤ人のウッチ移送強行
　　－自動車排気ガスによる「安楽死」抹殺へ－
おわりに

はじめに

これまでいくつかの拙稿で、いわゆる「最終解決」、すなわちヒトラー・ナチ体制、ヒムラー指揮下の親衛隊・ドイツ警察、その戦時治安警察機構としてのライヒ保安本部によるユダヤ人大量虐殺の歴史を把握するためには、具体的な政策展開を戦時下（独ソ戦の展開から世界大戦化のプロセス）における諸勢力の闘いの全体的な相互連関とその推移（比喩的に「力学構造」）の中に位置づけるべきことを指摘した[1]。この方法的見地に対比するとき、ユダヤ人問題を時系列的に抽象してみていくヒルバーグ的方法も、また直接の犯人に的を絞り込むブラウニング・ゴールドハーゲン的方法も、歴史理解を歪めることを強調してきた。その意味で、ブラウニングの方法を「ミクロ機能主義」、ゴールドハーゲンの方法を「ハイパー意図主義」と特徴づけるミュンヘン現代史研究所のザウルスキは[2]、正鵠を射ているといわなければならない。

学問的、歴史科学的には「失敗」した[3]ゴールドハーゲンの本がなぜこれほどまでにセンセーションを巻き起こしたかといえば、一方には議論展開の単純明快さ

（極端な一面性）、他方には、これまでの歴史書が死者・犠牲者への「敬虔な思い」からしても間接的にしか扱わなかった殺害現場そのものをこれでもかこれでもかと「詳しく、正確に」描いたことにある[4]。現実の加害・被害から50年以上経って、まったく「戦争を知らない子供たち」が研究者と研究成果の受容者の圧倒的部分を占めるようになった世代的状況（ナチ時代、第二次世界大戦の本格的歴史化とでもいうべきもの）も、大きな背景としてあるだろう[5]。

ともあれ、治安部隊によるユダヤ人殺害現場の血しぶきが見えてくるような視覚的叙述、テレビ世代、映像世代に訴える叙述の生々しさが人々の関心を引き付けたことは間違いない。しかし、視覚に訴える映像がそのリアリティとインパクトの反面として、個別の事象を全体の関連から一面的、恣意的に抽出する危険を内包し、誤った認識をもたらすことは、今日、日常的に頻繁に経験することである。したがって、ユダヤ人射殺の「実行犯（テーター）」の「動機」を対象とする対立的歴史理解、すなわち機能主義的ブラウニング[6]と意図主義的ゴールドハーゲンを内在的に批判する道は、全体的連関性への方法的見地に基づく実証である[7]。その視点から、先に「ユダヤ人東方移送政策とウッチ・ゲットー問題ーいわゆるヒトラー『絶滅命令』の力学構造ー[8]」をまとめた。

そこで本稿では、その後の段階について、すなわち、ウッチ・ゲットー問題とライヒ・プロテクトラートからのユダヤ人移送問題の急場しのぎの解決策として、ヒムラー、ライヒ保安本部（ハイドリヒ、アイヒマン）がウッチ市郊外ヘウムノにおけるガス自動車によるユダヤ人殺害作戦を選択していく道をたどってみたい。

ライヒ保安本部の特別出動部隊アインザッツグルッペのユダヤ人大量射殺行動を追跡した最近のオゴーレックの研究[9]も、これまでの研究史と議論を踏まえた上で、「ユダヤ人問題の最終解決」が1941年の真夏から秋以降に形を整えられたものであって、前もって作成されていたプランの実現というようなものではないと結論する点で、拙論と基本的に同じ見地に立っている。しかし、ヒトラーとヒムラーによって主導された「最終解決」の最初の一歩が「純粋な即興演奏」、「何の準備も無く、具体的な手本もないもの」とまで極論するのは[10]、彼らの思想構造の根幹にある「民族共同体」意識、「民族主義的世界観」、その全体構造に位置づけられ政治闘争の激流で鍛えぬかれた反ユダヤ主義が決して即興のものでないこと一つとっても、言い過ぎであろう[11]。オゴーレックが一次史料とアインザッツグルッペの戦後証言を詳細に検討して明らかにしている事実にも、反することである。

歴史上のさまざまのポグロムは一つの手本となるし、その背後には特有の政治的社会心理的共通要因がある。反ユダヤ主義がヨーロッパ・キリスト教社会で伝統的に持ってきた社会的機能をみても、独ソ戦準備過程と開戦後のナチ国家の命令類を通じる一貫性の点からも、その発動をたんなる即興性で見ることは問題である。ドイツ民衆の中に濃淡・レヴェルのさまざまな共鳴盤を持つ人種主義（アーリア人種優越論）とドイツ民族主義（自民族至上主義）がある。ヒトラー、ヒムラー、ハイドリヒ、ライヒ保安本部における人種主義的ドイツ民族主義の世界観・政策の一貫性がある。その主義と世界観が現実の諸勢力対抗関係の中で、どのように発動するのか。その発動の具体的な諸条件・諸形態を、比喩的にいって理念と現実の諸ベクトル群をこそ、できるだけ立体的に追跡する必要があろう。かつてよく使われた表現を呼び起こすとすれば、戦時下のこの上なく過酷な闘争場裏における人種主義的ドイツ民族主義の理念と現実の体制の頂点から末端にいたる「弁証法的統一」関係をこそ、明らかにしていくべきであろう。

1．ソ連占領地ユダヤ人殺戮の無差別化と「安楽死」技術転用の検討開始
― 1941年8月中旬 ―

ヒトラーの指令に基づき1940年夏から対ソ攻撃準備を進める中、国防軍参謀本部国防部は、「特殊地域」、すなわち軍後方地域の治安体制に関する指針を準備した。それを、「バルバロッサ」指令（「フューラー指令第21号」）発令の同年12月18日、参謀総長アルフレート・ヨードルに提出した。ヒトラーはこの草案に対し、いくつかの指示と変更要望を出した。「来るべき出兵は、単なる武器の闘い以上のものである。それは二つの世界観の対決に導く。この戦争を終結させるためには、敵の軍隊を撃破した空間の広さだけでは不十分である。全領域で国家を解体し、それに代えてわれわれと講和を結べる政府を樹立しなければならない。……ユダヤ的ボルシェヴィキ的インテリゲンツィアを除去しなければならない」云々と[12]。

1941年3月3日、ヨードルはヒトラーの指示を付し、第一に、陸軍作戦地域の「深さ」をできるだけ制限すること、軍政は樹立しないこと、その代わり民族的に一定の境界を区切ってドイツ全権委員（コミッサール）統治を行うこと、そのもとでできるだけ早急に新しい国家を樹立すること、第二に、すべてのボルシェヴィキ・リーダーと政治委員（コミッサール）を「ただちに無害化するために」、親衛隊ライヒ指導者の機関を陸軍作戦地域に投入することの「検討」など、3項目の指針を示し、

国防部に修正を命じた。参謀本部国防部はその指示に応じた修正草案を作成し、3月13日、国防軍最高司令部長官カイテルが署名した[13]。軍後方地域の裁判権をめぐる陸軍最高司令部（代表ヴァーグナー）と親衛隊ライヒ指導者（代理ハイドリヒ）の調整は3月26日までかかった。その調整過程で、3月17日のライヒ宰相府会議において、ヒトラーは「幹部の除去」、インテリゲンツィアの物理的絶滅、それによるソ連の「指導機構の破壊」をヒムラー指揮下の特別部隊アインザッツグルッペの任務とした[14]。

この段階で明確なのは、ドイツ占領下に入ったソヴィエト国家指導部の「即座の無害化」、「ユダヤ的ボルシェヴィキ的インテリゲンツィアの除去」であり、その目的はドイツによる民政統治体制の可及的速やかな樹立であった。その課題を担うのが親衛隊ライヒ指導者・ドイツ警察長官ヒムラーとその指揮下の警察機構だった。占領統治の体制は、国防軍が敵正規軍を撃滅し、ヒムラーが敵の政治的警察的な鎮圧を行い、4ヶ年計画全権ゲーリングが経済的課題を担当し、東方占領地域大臣ローゼンベルクが政治的な新しい機構の樹立に邁進するという分業関係[15]で成り立っていた。

占領下ソヴィエト・ユダヤ人の無差別殺戮命令がいつの時点で誰からアインザッツグルッペに伝えられたかをめぐっては、ニュルンベルク継続裁判のオットー・オーレンドルフ証言、これを否定するシュトレッケンバッハの証言（1955年、ソ連の戦時捕虜から生還）以来議論されてきた。オゴーレックは、これまでの論争を批判的に検討し、混乱のもとになった戦後裁判のさまざまの証言を検討した。さらに、41年6月のハイドリヒのアインザッツグルッペ隊長たちへの送別の辞を確認し、また4つのアインザッツグルッペへの任務通達・命令内容と到達時点を確認した。そのうえでの彼の最近の見解をここでは採用しておきたい。それによれば、8月までは、本来的な、あるいは狭い意味での「治安・平定措置」の範囲でコミュニスト幹部、破壊妨害者、略奪者などの「粛清」、射殺にとどまっていた[16]。

しかし、1941年8月、ドイツ軍の進撃は次第に高まるソヴィエト軍の抵抗で困難になった。7月30日、ヒトラー指令第34号は、中央軍集団に防御への転換を命じた。同日スターリンはローズヴェルト大統領特命全権ホプキンスと会った。アメリカ政府の戦時物資供給が約束された。8月2日、アメリカの対ソ援助物資供給が始まった[17]。国防軍の公式報道は、対ソ前線での戦果ばかりを知らせていた。8月7日、スモレンスクを落とし、約31万人を捕虜にし、3205台の戦車、3120門の大砲、その他無数の武器類が戦利品だと報道した[18]。しかし、その夜、さらに

翌８日の夜、ソヴィエト機がベルリンを空襲した。国民には知らされなかったが、国防軍最高司令部の戦時日誌によれば、たとえば中央軍集団の第9軍地域では８月11日、「敵が全域で制空権を握って」いた[19]。他方、西部でも８月12日イギリス空軍機がケルンを空襲した[20]。

ドイツ民衆は、８月初旬には、ドイツ軍が「最近数週間、基本的には前進していない」ことを察知し、噂していた。彼らは特別報道ではやくキエフ、レニングラード陥落を聞きたがった[21]。たしかにオデッサ、ニコライエフの封鎖が特別報道された。しかし、民衆は「本当の特別報道などではない」[22]と失望した。軍公式報道がドイツ軍の被害を比較的少なく報じても、野戦郵便や帰還負傷兵士などの話などと突き合わせ、民衆はかえってそこに東部戦役におけるドイツの「非常に高い損害の確証」を見る始末だった[23]。民衆は、ドイツ人戦死者の数を「約100万人に達するらしい」と噂していた。それは、不安と軍の情報操作、情報統制によって膨張した数字だった。しかし、ドイツ軍の精鋭がソ連の厳しい反撃でしだいに大きな被害を被るようになったのは事実だった。ウクライナの占領はドイツが巨大な穀物庫を掌中に収めたことを意味し、そのいくつかの都市を占領したことは確かに大きな前進ではあった。これまでに獲得したこうした戦果を多くの民衆は「喜んだ」。しかし他面で、これまでにソ連で獲得した領域とこれから闘いとらなければならない広さとを比較し、「東部での戦争が厳しい冬を越えて長引くかもしれないと恐れて」いた[24]。

前線の厳しさをおおかれすくなかれ反映したドイツ人「民族同胞」のすそ野に広がる意識を、ヒムラー、ハイドリヒとライヒ保安本部は、第Ⅲ局（内国情報部）作成の「民情報告」を通じて、数日置きに掌握していた。秘密情報網がキャッチする限りでは、８月14日のチャーチル・ローズヴェルト会談、大西洋憲章は民衆の注意を「引かなかった」。しかし、アメリカの参戦がドイツとロシアの対決の推移によるだろうとの見方は「次第に広がって」いた。第一次世界大戦の記憶が生々しい多くの民衆にとっては当然であろう。敵側におけるアメリカ・インパクトの増大に対し、味方陣営には亀裂が深まりつつあった。クレタ島でドイツの被害が大きかったのは、「イタリア人飛行士の偵察が不十分だったからだ」などと、イタリアの戦闘力への不信は増大していた[25]。

東部戦線のドイツ国防軍後方地域における不穏状態・抵抗も拡大し、組織化されたパルチザン活動も多様な形態で形を整えつつあった。ヒムラー、ハイドリヒなど治安警察機構のトップは、ライヒ保安本部第Ⅳ局作成の「事件通報・ソ連」を通じて、その情報を毎日把握していた[26]。このような状況下で、ヒムラーは８

月14日15日、中央軍集団後方地域にあるミンスクとバラノヴィッチに出向き、コミュニスト、ユダヤ人の射殺現場を視察した。そして、ロシア中部担当高級親衛隊警察指導者バッハ-ゼレウスキー、アインザッツコマンド隊長ブラートフィッシュ、アインザッツグルッペB隊長ネーベに対し、ソ連占領地域で遭遇した全ユダヤ人の無差別処刑を命じた[27]。ただし、このヒムラーの命令は口頭命令であり、文書証拠が残っているわけではない。したがって、文字どおり「無差別に処刑せよ」といったかどうかは確認できない。治安体制確立の困難化、ソ連における抵抗の激化から無差別殺戮が実際に進行しはじめ、それをヒムラーが承認し、叱咤激励したということであるかもしれない。この時点前後から、次第に女子ども老人を含む「処刑」が広がりはじめるのは事実のようである。その統計的研究は今後の研究にまつしかない。ただ、ユダヤ人の人口が多い白ロシアの中心都市ミンスクでヒムラーの「無差別殺害命令」が出されたのは偶然ではない。そこは、9月末に約3万数千人のユダヤ人がキエフ大火、住民不安、大量住宅消失などの責めを負わされて射殺されたウクライナの首都キエフと同様、早急に民政体制を確立すべき占領地域の最東端にある重要拠点都市だった[28]。冬の到来以前に、レニングラード、モスクワを陥落させなければならなかった。その後方地域は最高に厳しい手段で安定を図らなければならなかった。その課題意識がヒムラー、ハイドリヒ、ライヒ保安本部には鮮烈であった。周知のようにハイドリヒはレニングラードへの徹底的空襲、潰滅をヒトラーに提案していた。

射殺部隊の隊員はしばしば精神・神経の崩壊状態に陥った。ヒムラーも射殺現場の阿鼻叫喚と血しぶきを自分の目でみて「動揺」(バッハ-ゼレウスキー証言)した。精神病院に入院中のアインザッツグルッペ隊員を見舞って、女性と子どもを含む無差別射殺が隊員の精神にどんなに負担になるかも確認した。この経験からヒムラーは、「射殺はもっとも人間的なやり方ではない」との結論に達した[29]。ネーベにこの隊員たちの苦しみをできるだけ早く終わらせるような方法を探すよう命じた。隊員にとって「より人間的な」処刑方法が求められた[30]。

バッハ-ゼレウスキーは戦後の証言で、この時が「ガス室誕生の時」だとみた[31]。しかし、ガス室自体はすでに2年ほども前から誕生していた。ネーベは同時にライヒ保安本部第V局(刑事犯罪撲滅)の長であり、その下部機関として刑事犯罪技術研究所(Kriminaltechnisches Institut, KTI)があった[32]。この研究所は1939年9月から始まったドイツ人の精神障害者、優生学的に劣等とされた人々への「安楽死」作戦において、最適方法を研究し、一酸化炭素によるのが最適だと結論した。1940年1月初め実験を行い、気密の部屋に純粋一酸化炭素を入れて精神

障害者を「安楽死」させた。その後、この方式が他の「安楽死」施設でも用いられた[33]。したがって厳密にいえば、8月中旬は、ドイツ国内の精神病者「安楽死」抹殺で開発された一酸化炭素ガス室技術が、ソ連占領地のユダヤ人殺害手段に適用される転機（転用への検討が始まった時点）というべきである[34]。

2.「特殊自動車（ゾンダー・ヴァーゲン）」[35] 開発とソ連占領地への投入
―配備開始1941年11月末―

固定したガス室ではなくて、「車上備え付けガス室」[36]、すなわち最初のガス自動車は、戦後裁判の証人供述によれば、1939年12月から40年はじめ、精神病施設撤去に際して使用された家具用付属車であった。ポメルン、オーバーシュレージエン、編入ポーランド地域の精神病施設の患者は、コーヒー会社の看板「カイザー・コーヒー会社」名を両側面につけてカムフラージュした付属車のなかで、鋼鉄製ボンベから導入された純粋一酸化炭素で「安楽死」抹殺された[37]。この作戦を指揮したのは、親衛隊中尉・刑事警察課長ヘルベルト・ランゲで、彼のコマンドは40年5月21日から6月8日にもオストプロイセンのゾルダウで「カイザー・コーヒー会社」型ガス自動車で1558名の病人を「疎開」させた[38]。

しかし、「一酸化炭素ボンベをロシアまで輸送するのは不可能」なので、このタイプをソ連占領地で使用することはできなかった。1941年9月初め、ネーベは刑事犯罪技術研究所のヴィトマンに爆薬と金属製ガス管をミンスクに持ってこさせた。ロシア人女医の証言によれば、彼らは9月18日にミンスクで実験を行った。まず、塹壕に精神病者を入れて爆破する実験を行ったが、それは成功しなかった。ついで、ヒムラーも訪れたモギレフの精神病施設で金属製ガス管を使って実験を行った。最初、自家用車の排気ガス管から金属製ガス管を使って壁の穴から密閉した部屋に排気ガスを注入した。5分、さらに8分注入して何の作用も起きなかった。そこでさらに、秩序警察隊の貨物自動車の排気ガス管からもう一本、同じ密閉空間に排気ガスを注入した。そうすると人々が意識不明になるまで、「わずか数分」だった。二つの車のエンジンをさらに10分間吹かせた。ネーベはこの実験結果から、排気ガスによる殺害を実用的だと結論した。しかし、さまざまの出動地に移動しなければならないアインザッツグルッペに固定施設は不向きだった。移動型が開発されなければならなかった。こうしたことを踏まえて、刑事犯罪研究所は、移動型排気ガス利用ガス室自動車の製造をハイドリヒに提案した[39]。

このガス自動車開発を促進する背景を確認しておくために、この9月から10月

における戦局転換に簡単にでも触れておかなければならない。ゲッベルスの1941年10月4日付日記によれば、占領地の情勢はヒトラーの危惧を強めていた。彼の危惧は、「これまでにソ連から獲得した地域のパルチザン活動で増幅されていた」[40]。ゲッベルスは、さしあたりはモクスワ攻撃に期待を集中して、パルチザンの脅威など克服できると高を括っていた。しかし、10月末までに独ソ前線の事情は激変する。すでに10月10日には、有名なライヒェナウ将軍の「東方地域における軍隊の態度」に関する命令がだされていた。それはさしあたり第6軍司令官ライヒェナウの命令として、スターリングラードに向かうドイツ軍の直面する困難に抗すべく発令されたものだった。しかし戦局転換に伴い、他の軍部隊でも同様のものが出されるようになった。ヒトラーはライヒェナウ命令を「すばらしい」とほめた。一ヶ月すこしたった11月17日、陸軍最高司令官は、同様の命令が「もしまだ発令されていなければ」ライヒェナウ命令を模範にして出すようにと東部軍に命令した[41]。

ライヒェナウによれば、「ユダヤ的ボルシェヴィキ的体制に対する戦役の根本目標」は、ヨーロッパ文化圏におけるアジア的影響力の「根絶であり，その権力手段の完全な破壊」であった。その根本目標からするとき、軍隊は「伝統的な一面的な」兵士としてのあり方を超越しなければならなかった。東方地域における兵士は、「通常の戦術規則に従う戦士であるだけではなく、仮借ない民族主義理念の担い手であるだけでなく、ドイツ民族および同種民族に対するすべての野蛮行為に対する復讐者」でなければならなかった。兵士は、「ユダヤ的劣等人種に対する厳格な，だが正当な懲罰の必要性を完全に理解しなければならない」のだった。「経験上、常にユダヤ人によって企てられている反乱を芽のうちに摘んでしまうため」であった。前線の背後での敵に対する戦いが「まだ十分に真剣にとらえられていない」とみて、パルチザン、ソ連情報員との戦いを仮借なく行うことを命令するのだった[42]。

ゲッベルスは1941年10月30日の日記で、「天候状態が東部でわが全作戦を不可能にした」と記さざるを得なかった。しかしライヒェナウ命令，ないしそれに類似の命令が東部軍全体に広げられなければならない軍事情勢と後方地域情勢が示すように、問題は単に「天候状態」に帰すことはできなかった。理由付けはさておき、ゲッベルスも、「対ソ戦が決定的遅延に陥ったとはっきり確認しなければならな」かった。それでも、国家の頂点にいるゲッベルスは「天候が歴史を作ることありえないと確信」しておれた[43]。だが、ウッチ・ゲットー問題に端的に現れているように[44]、占領地の現状は深刻さを増していた。ゲッベルス自身、ソ連

占領地への視察旅行ですぐにそのことを認めざるをえなかった。

二日後の11月１日の日記でゲッベルスはブラウヒッチュとの会談内容を記している。ブラウヒッチュからドイツ軍が直面する「異常に困難な天候状態の訴え」を聞いた。彼とブラウヒッチュはスターリンが「当面決して屈服しようとはしないだろう」と見る点で一致した。したがって、占領地域の住民の食糧問題が「まったく困難になる」ことも目に見えていた。食糧問題は治安問題であった。占領地域住民を「補給線を確保するために大人しくさせておかなければならな」かった。しかしそのために本国の、すなわち「ライヒ自身の食料在庫に手をつけることは問題外」だった。「補給問題が目下、もっとも困難な問題」だった[45]。ブラウヒッチュとの会談後、設営給養担当のヴァーグナー将軍と会談して、ゲッベルスは補給の「全体的な困難さとそのものすごい規模」をさらに具体的に認識した。「敵が冬将軍に期待をかけても」無駄だとわからせるようにするべく、ドイツ軍は、軍事補給確保のために「超人的な」努力をしていた[46]。アマルティア・センは「貧困と飢餓」の論考で、社会的に食料が十分であっても社会システムのあり方によって飢餓が発生することをあらためて示した。社会的に全体としては飢饉を回避するに十分な食料がありながら、特定職業集団に属する人々が300万人も餓死したという1943年のベンガル飢饉がセンの問題意識の基礎にあった。それはイギリス統治下であり、イギリス総督支配下の出来事だった[47]。しかし、戦時下のドイツ占領地の現実は、まさに絶対的な食料不足の状態にあった。ゲッベルスの記述に見られるように、ライヒの食料在庫に手をつけるとすれば、ドイツ支配下全体ではまだ食料配分の可能性はあった。だが、それは不可触・不可侵領域だった。したがって問題は占領地内部で、どの社会グループから食料を取り上げるかという社会的配分の問題になっていた。

10月下旬から、ソ連占領地でドイツ軍は「ものすごい力の集中で、毎日新しく出現する困難に打ち克とうとしたが、ますます未解決問題が山積する」状態だった。だが軍隊の士気はまだ「賞賛に値する」ものだった。兵士は全体として勝利を「不屈に確信しており、情勢ーたとえそう絶望的ではない情勢だとしてもーに惑わされてはいなかった」。とすれば、ゲッベルスがそこから引き出すのは、政治的軍事的教育の重要性だった[48]。彼の大衆宣伝、国民啓蒙は、民間人が「これまで以上に平和の残滓の最後の残り物さえも断念しなければならないとしても」、東部の軍隊のために全力を注げるように[49]、政治的軍事的教育の広い裾野を形成しなければならなかった。

11月２日，ゲッベルスはヴィルナに乗り入れた。雪のため、スモレンスク前線

まではいけなかった。ヴィルナで前線から休暇で帰ってきた青年将校と話した。彼らは「なかば文明化した町」ヴィルナに来て「喜んでいた」。対ソ前線は「まったく残酷だ」と語った。対ソ戦は前代未聞の独特の戦いだと彼らは語っていた。彼らは、「ソヴィエト兵士の抵抗力にまったく敬服していた」。他方で彼らは、天候状態さえよければ「ボルシェヴィキ軍を打ち負かすことに成功する」と強調していた。問題はその天候状態だった。「今年はいつもと違った」[50]。

ヴィルナ市は人口25万人ほどだった。そのうち四分の一がユダヤ人だった。ユダヤ人の数は，ドイツ軍の進撃後リトアニアから逃れてきたユダヤ人で膨れ上がっていた。独ソ不可侵条約に基づくバルト三国、ポーランド東部へのソ連侵攻の時期、「ユダヤ人はGPU（ゲ・ペ・ウ）のスパイ、密告者」だった。すくなくとも多くのリトアニアの民族主義者やインテリがソ連侵攻時期に死刑に処された。その責任は，ドイツ侵攻下ではユダヤ人にあるものとされた。ヴィルナの町で、リトアニア人とさしあたりまだ人口の過半数を閉めているポーランド人のユダヤ人に対する復讐法廷が開かれた。それは「残酷極まりない」ものだった。そして、一般ユダヤ人大衆はゲットーに押し込められた。ユダヤ人がなおゲットーに留まり得たのは、彼らが手工業の担い手だったからである。リトアニア人も手工業はユダヤ人に頼らざるを得なかったからである[51]。

ヴィルナの普通の街中は、ゲッベルスの見るところ「戦争の痕跡をほとんど示していなかった」。ところが、ゲットーを車でちょっと一周してみると、印象は「戦慄すべきものになった」。ゲットーではユダヤ人が重なり合うようにしてうずくまっていた。「身の毛のよだつような格好」だった。路上には「恐ろしい風体のものがぶらついて」いた。夜間にはゲッベルスですら「出くわしたくはない」と書き止めるほどのものだった。だが日記にはその一文のあと、一転して、自分の不快感・恐怖感を裏返した文句が続く。すなわち，ゲッベルスは，ユダヤ人抹殺の必要性を書き記すのである。「ユダヤ人は文明化した人類にとりつく虱だ。どうにかして抹殺しなければならない。そうしないと彼らは繰り返し厄介で面倒な役割を演じつづけることになる。彼らに対して必要な野蛮性を行使する場合にのみ、始末をつけることができるのだ」と[52]。ユダヤ人抹殺へのベクトルは，このゲッベルスの現地視察からも強化された。

背景で進行するソ連占領地の劇的転換とユダヤ人抹殺へのベクトル強化についてはこの位の示唆にとどめて、つぎにすすもう。ハイドリヒは1941年10月始め、親衛隊中尉で治安警察技術担当係長ラウフに、移動型排気ガス利用のガス自動車建造を命じた。ラウフは治安警察自動車係りの部下に命じて、自動車の密閉箱型

荷大台に排気ガスを注入することが技術的に可能か検討させた。担当者は、箱型荷台（ボックス）製造専門会社ガウプシャト社（ベルリン-ノイケルン）に、「発疹チフスで死んだ死体を運べるような」密閉荷台を作れるか問い合わせた。答えは可であり、ラウフは別に５―６台のシャシーを調達し、ガウプシャト社に提供した。ガウプシャト社から引き渡された車に、治安警察自動車係りが工作を施した。自動車の排気ガス排出口に排気ガス引き込み用ホースを取り付け、車の床下に約58ミリから60ミリの穴を開け、注入管を取り付け、接続した。さらに、実際にボックス内の一酸化炭素がどのような濃度になるか、ガスマスクをつけた係員に乗り込ませて実験を行った。何分ほどでボックス内の一酸化炭素が１％になるかを調べた。この濃度なら人間は短時間で深い意識喪失状態に陥り、死にいたる（一酸化炭素中毒の第三段階)。実験の目的は一酸化炭素中毒の第一・第二段階を回避することだった。なぜなら、第一段階は意識混濁と吐き気であり、第二段階は錯乱状態だったからである。この実験を終えたあと、刑事犯罪技術研究所が作業場をもっているザクセンハウゼン収容所で試用実験を行った。この試運転は11月３日だった。この試運転には関係の化学者や親衛隊将校が立ち会ったのに、責任者ヴィトマンが欠席していたことから、彼のキエフ出張中の11月３日に試運転が行われたと推定されるからである。ボックスには30人ほどの男子が入れられた。立ち会いの化学者の調べたところ、死体はばら色で赤みがさしていた。一酸化炭素中毒で死んだ人に特徴的な外観だった。実験成功はハイドリヒに報告された。実験車についで、のこりの4－5台の改造が行われた[53]。

ザクセンハウゼンでの試運転を終えた後の改造に要する期間、すなわち約８日から14日間、それから実際に使用する現地への輸送期間といったことを計算に入れると、最初のガス自動車が出動可能となったのは、1941年11月末から12月初めだったということになる。事実、ガス自動車の最初の出動は、アインザッツグルッペＣの管轄地域であり、ポルタヴァのゾンダーコマンド４aだった。そこでは1941年11月末にユダヤ人殺害にガス自動車が使われた。ガス自動車は射殺部隊といっしょに出動した。射殺も行われた。自動車で一回に約30人が「運ばれた」[54]。目撃者証言によれば、２台のガス自動車が監獄の中に入ってきて、男女、子どものユダヤ人を獄房の真ん前で車に乗り込ませた。運転手はボックスのドアが閉じられた途端に車を走らせ、ポルタヴァ郊外の野原に運んだ。ドアを開けると、最初もうもうたる煙が出てきた。ついで痙攣しもつれ合った人間の重なりが見えた。実に「恐るべき光景」だった[55]。

12月８日には、ヘウムノ（クルムホーフ）でガス自動車が使われはじめた。ヘ

ルベルト・ランゲの特別コマンドがこれにあたった[56]。ヘウムノには最初、2台投入された。それは、アメリカ製の3トントラックを改造したものだった。自動車のボックス内の大きさは、長さ4メートル、幅2メートルで、一度に約50人が殺された。さらに1941年のクリスマス以前に、二つのこれより小さなガス自動車がベルリンからリガに送られた。「ディアモントーヴァーゲン」と称されるタイプだった。アインザッツグルッペDの地域では、約50人を積み込める一台のガス自動車が1941年の年末に確認できる。親衛隊少尉ベッカーは、ヒムラーと総統官房第二本部（国家・党問題担当）長ブラックとの話し合いに基づいて1941年12月ライヒ保安本部に出向き、ヒムラーからガス自動車作戦の続行を知らされ、ラウフから東部のガス自動車出動を調査するように依頼された。12月14日が出発予定日だったが、ベッカーが事故ででかけられなくなり、実際の出発は1942年始めにずれ込んだ。彼の視察旅行の結果、1941年11月末から12月にガス自動車が現地で出動したことが確認された[57]。

1941年の年末、5トン車のザウラー型ガス自動車（長さ5.8メートル、高さ1.7メートル、「輸送」可能人数100人）が大量に発注された。1942年6月23日のドキュメントによれば、ガウプシャト社に発注された30台のうち、すでに20台が完成し、供給されていた。ベッカーの1942年5月16日付ラウフ宛て書簡によれば、1941年中に製造された「第一シリーズの車は天候が悪いと出動できなかったが、第二シリーズ（ザウラー型）は、雨が降っていてもまったく安定している」のだった[58]。この大型ガス自動車をアインザッツグルッペのすべてのアインザッツコマンドに配備すること、それによる「安楽死」ガス抹殺キャパシティの大幅な引き上げが、12月末に決まったのである[59]。1942年始め、白ロシア治安警察司令官（ミンスク）は、上官のオストラント治安警察司令官（リガ）にガス自動車の追加配備を要請した。担当の資材調達将校はライヒ保安本部に対し電報を打った。「白ロシア治安警察・親衛隊保安部司令官のもとには、特別処理を行うべきユダヤ人移送が毎週到着しています。当地にある3台の特殊自動車（エス・ヴァーゲン）ではこの目的には不十分であります。5トン車の特殊自動車一台の追加をお願いいたします。同時に、当地にある3台の特殊自動車（2台のディアマント型、1台のザウラー型）のために、20本の排気ガス管をお送りください。現在のものはすでに気密性がよくないのです」と[60]。

以上で見てきたように、ガス自動車の開発、投入、配備を貫くのは、ソ連占領地のユダヤ人無差別殺戮を担ったアインザッツグルッペ隊員にとっての「より人間的な」手段の創出であった。それでは、予定外のヘウムノへの投入はどうして

行われたのか。これを解く鍵が、1941年9月の「フューラーの希望」(その背後にあるライヒとプロテクトラートのユダヤ人排斥圧力、その諸ベクトル)であり、受入候補地ウッチにおける追加収容不可能な実態である[61]。

3．西ヨーロッパ各地の不穏状態とユダヤ人東方移送への圧力群

ヒトラーが対ソ戦続行中にもかかわらず、ライヒやプロテクトラートのユダヤ人の東方移送を「希望」した要因は多様である。しかしそれら諸要因の背後に共通する要因は、戦局の転換であり、それによって規定された諸条件の変化であった。ヴィッテが指摘する要因の一つはドイツ諸都市への空襲だった。一般的な住宅不足に加えて、空襲の激化、それに伴い空襲で焼け出されたドイツ人の増加、戦時下でのその収容困難化が、ドイツ、オーストリア、チェコのユダヤ人をウッチへ移送する国内的プッシュ要因となった。41年9月15日から16日の夜、ハンブルクは56機のイギリス爆撃機による中規模程度の空襲を受けた。3波の攻撃で、造船所、工場などが打撃を受けた。ハンブルクの大管区長(ガウライター)カール・カウフマンは、大管区長としてボルマンを通じヒトラーと直接接触した。彼がゲーリングに知らせた書簡によれば、ヒトラーはカウフマンの提案を受け入れた。すなわち、カウフマンはヒトラーに、空襲で焼け出された人々の幾人かには宿泊を提供しなければならないと進言したところ、「フューラーは直ちに私の示唆を受けいれ、ユダヤ人移送のために必要な指示を出した」。移送政策への転換の基本的命令はヒトラー個人が発したのであるが、それを引き出したのは、このような地域のイニシアティヴの累積によるものだった。それを促す各地への空襲の増加、重要都市での被害の増大であった[62]。

日本のことを考えてみればわかるように、空襲の増加、焼け出された人の増加は、ただちにユダヤ人排除に結びつくものではない。ユダヤ人の存在、これを生け贄とする社会的伝統が必要条件を形成する。ナチの反ユダヤ主義的被害妄想からすれば、ドイツに対する空襲の教唆者はユダヤ人であり、空襲から利益を受けるものも「寄生虫」ユダヤ人ということになる。また、ユダヤ人は連合国の「第5列」ともされる。ナチ党ライヒ宣伝部は、1941年9月第二週の「今週の言葉」で、ヒトラーの有名な国会演説の一説、すなわち1939年1月30日の予言を載せた。「今日再び私は予言者になろう。もしもヨーロッパの内外の国際ユダヤ人が諸国民をもう一度世界戦争に引きずり込むことに成功したら、その結果は世界のボルシェヴィキ化ではなく、したがってユダヤ人の勝利ではなく、ヨーロッパのユダ

ヤ人種の絶滅であろう」という演説の一節を掲げたのである[63]。真の意味での世界戦争は対米宣戦布告で始まるが、41年8月からのアメリカの対ソ援助開始、8月14日のチャーチル、ローズヴェルトの大西洋憲章発表など戦争の世界化が実質的に進み、それへのナチ党幹部における怒り・反発がこの予言の想起となったといえるであろう。予言と実行との間には距離があるが、それでも絶滅政策へのベクトルがこの大量宣伝によって一つ増えたことは確実だろう。

ドイツ軍の進撃はそれに対するソ連の対策の一つとして、ヴォルガ・ドイツ人40万人のシベリアへの強制移送を引き起こした。ローゼンベルクはこの事を41年8月28日に知った。彼は9月14日、プロイティガムを総統大本営に派遣して、ヒトラーに報復措置を提案した。すなわち、「中央ヨーロッパのすべてのユダヤ人をわれわれの統制下にある東部地域へ移送する」ことを提案した。プロイティガムが翌15日にカイテル元帥から聞いたところでは、ヒトラーは外務省がそれを前もって承認していることを求めた。リッベントロップとヒトラーの会談は9月17日午後に行われた[64]。ユダヤ人東方移送を求める一つの太いベクトルがここに加わった。

移送圧力は、ヒトラーの「希望」の範囲を超えて広がっていた。バルカン半島、ユーゴスラヴィア、特にセルビアのパルチザン活動は激化し、現地軍はユダヤ人をどこかに追放しようとした。9月初旬、セルビアの情勢は「これまでと変わらず、深刻」で、クロアチアから西部セルビア地域に侵入した「蜂起の一味」は、ドイツ軍に「非常な損害」を与えた。一味は撤退したが、別の町への「攻撃の試み」が察知できた。ギリシャでも、ドイツ国防軍を破壊するビラを撒いたたくさんのコミュニストを逮捕した。スロヴァキアのプレスブルクでは反ハンガリーのデモが発生した[65]。ポーランドとソ連の支配が短期間に入れ替わり、さらにドイツが占領した地域ではポーランド人、ウクライナ人、ドイツ支配者の利害が錯綜した。ポーランド人農民が取得していた土地が、1939年9月—1941年7月、ソ連による占領下でウクライナ農民に分配された。現実利害とポーランド人、ウクライナ人のナショナリズムはぶつかり合った。ウクライナ人農民の間ではポーランド人に土地が返却されるのではないかとの不安が広がった。ウクライナ民族主義バンデラ・グループは地下に潜入した。ガリツィアをポーランド総督府に編入したことは、ポーランド人の間にはポーランド要因の強化として歓迎された[66]。このようなドイツ支配下諸民族間のナショナリズムのぶつかり合いは、その矛先を共通の生け贄、ユダヤ人に向ける政策ベクトルの一つとなった。

フランス占領地でも、現地の反ドイツ的エネルギーをそらすため、ユダヤ人を

生け贄として求める意識が先鋭化し、ユダヤ人移送を求める圧力が高まっていた。41年5月14日、3700人以上の移民ユダヤ人（そのほとんどがポーランドから、一部はチェコスロヴァキア、オーストリアから）を逮捕して、二つの収容所に入れていた。さらに8月20日、別稿[67]で見たようなパリでの抵抗の兆候に対抗して、パリで数日間の大規模一斉検挙が行われた。4200人以上の男子ユダヤ人がドランシーの新収容所に移送された。一万人以上のユダヤ人囚人で三つの収容所は満杯状態となった。フランス当局はこれ以上収容所を用立てようとはしなかった。ドイツ占領当局はユダヤ人をさらに収容所に入れようと計画したが、その政策は一時中止せざるを得なかった。このジレンマに直面して、パリ大使館の親衛隊少佐カールテオ・ツァイチェル博士はオットー・アベッツ大使に、外務大臣を通じてヒムラーに東部の新占領地にユダヤ人を移送しなければならないことを説得するように求めた。熱狂的反ユダヤ主義者ツァイチェルは、そのために二通の覚え書きをまとめた。第一通で、占領地での全ユダヤ人の不妊化手術を要求し、アベッツにリッベントロップ、ヒトラーと会って提案するよう具申した[68]。

8月22日の第二覚え書きでツァイチェルは、要塞建設に従事するトット機関さえも十分なバラックを手に入れることができない状況で、ユダヤ人問題解決に収容所不足が立ちふさがっていることを強調した。フランスにおける収容所不足の唯一の現実的解決策として、満杯になった収容所からユダヤ人をどこか他に移送するしかないと緊急の移送政策を提案した。その要求はベルギーやルクセンブルクのユダヤ人担当委員からも出されていたことだった[69]。ツァイチェルは8月段階の対ソ前線とソ連占領地の実態を知らなかった。彼が知ったのはヒトラーによるローゼンベルクの東部占領地域大臣への任命であった。彼には対ソ進攻の成功面しか見えていなかった。東部占領地域の「どこかに、この新しい状況のもとで、これまでにドイツが占領したすべての地域から全ユダヤ人をまとめて送り込む」のが、彼の提案だった。ウッチや総督府のワルシャワ、ルブリンからさらに東にゲットーを移してしまえば、これら諸都市も「喜ぶだろう」とした。「フューラーの命令に基づき」、ヒムラーが発している厳しい指令で、ユダヤ人を他に移送することは目下決してできないが、そのことによって、占領フランスは「もっともひどい」目にあっているというのである[70]。東部に移送先を求めるベクトルは、ここでも太く強力になった。ローゼンベルクが中央ヨーロッパのユダヤ人移送を提案したのに対して、ツァイチェルは全ヨーロッパ大陸を「ユーデンフライ」にすること、ユダヤ人の全ヨーロッパからの一掃を要求した。ツァイチェルは「マダガスカル計画」—すでに非現実的になっていたし、何年もかかることなので—

を拒否し、東方への即座の移送政策を求めた。彼は、アベッツに外務大臣リッベントロップに会い、さらにローゼンベルク、ヒムラーと談判して、自分の考えを伝えるように求めた。さらに彼の覚え書きがゲーリング元帥にも提出されるよう求めた。彼はゲーリングから強力な支持が得られると確信していたのである[71]。

ツァイチェルが提案したアベッツ・ヒムラー会談は、モスクワ特別文書館所蔵のヒムラー日程表によれば、41年9月16日に総統大本営での会食後、開かれた。アベッツ大使はヒムラーから「輸送調整ができればすぐに」フランス占領地の収容所からユダヤ人を移送するとの約束を取り付けた[72]。ヴィッテは、これが西ヨーロッパ国家の「ユダヤ人問題の最終解決」への最初の具体的一歩だったという。しかし、ヒムラーの約束は、移送開始であり、移送後に抹殺することを明言したわけではない。9月18日のグライザー宛ての書簡からわかるように、この9月中旬段階では移送候補地ウッチの受入不可能な実状をまだ知らないヒムラーが、それ以上に事情を知らない遠来のパリ駐在大使に対し、空言をもてあそぶことはありえない。「最終解決」の意味は、ここではまだ東方移送である。

4．ヒムラー・ハイドリヒによるライヒ・ユダヤ人のウッチ移送強行
ー自動車排気ガスによる「安楽死」抹殺へー

ウッチ・ゲットー責任者の文書を添えたユーベルヘーアの移送拒絶書簡（1941年10月4日付）を踏まえ、ハイドリヒは、10月8日、彼と折衝した。同日付けハイドリヒのヒムラー宛て電報によれば、ユーベルヘーアは、上司の大管区長グライザーの承諾があるにもかかわらず、受け入れを拒否した。すなわち、「大規模な国防軍注文のため、軍需生産プログラムを危険に陥れることなしに2万人のユダヤ人と5000人のジプシーをリッツマンシュタット・ゲットーに受け入れることはできない」と表明したのである[73]。

ハイドリヒからすれば、このユダヤ人とジプシーの追放は、「絶対的に必要なことであり、もはや延期できない」ものだった。そこでユーベルヘーア宛てに電報を打った。リッツマンシュタット・ゲットーへの2万人のユダヤ人と5000人のジプシーの受け入れは、「大管区長グライザーが、私に（すなわちハイドリヒに…引用者）承諾したこと」だった。「私は貴殿の危惧を承認できない。大管区長グライザーも同じ立場であり、所与の状況への反対、既に始まった作戦の中止は不可能である。移送列車は、ライヒ交通省によって作成され、提出されている運行計画にしたがい、リッツマンシュタットに向かうことになろう」とした[74]。ヒ

ムラーは、ハイドリヒの申し立てを受けて、ただちにユーベルヘーアに手紙で受け入れを厳命することとし、手紙の発送は翌9日とした[75]。

ヒムラーからユーベルヘーア宛てに送られた厳命書簡の日付は10日となっており、つぎのよう内容だった。ヒムラーは、「新たなユダヤ人を割り当てられることが気持ちのいいことでないことは自明である」としながら、しかし、「あなたのガウライターと同じように当然の理解を示してくださるように切にお願いする」と。「ユダヤ人受け入れは、ライヒの利益のため、またユダヤ人を西から東に段階を追って排除していくべしとするフューラーのご意志に従うもので、ぜひとも必要なことなのだ、と[76]。

「ライヒの利益」とそれを体現する「フューラーの意志」、これほど決定的な命令根拠はないではないか。したがって、ヒムラーは、ユーベルヘーアの部下によって「手際よくまとめられた反対理由など認めることはできない」とはねつけた。「防衛経済の仕事が危険にさらされる」というのは、「ひとが何か拒絶しようとする場合、今日ドイツでもっとも好まれる反対理由」としてあげられることだ。しかし、そんなことを「承認しない」と。だれも、ユダヤ人を防衛経済的な仕事が行われているところに泊めるべきだなどとは「要求していない」。要求していることは、この2年半の間にユダヤ人の数が相当減少したことで「空いた家屋に」宿を取らせるようにということだけだ、とヒムラーはいう[77]。

伝染病の危険についてもヒムラーは認めようとしない。新たな割り当てによっても、元々の住民数になるだけだから、危険は「大きくはならない」とする。放火の危険も、ヒムラーは「非常に簡単に押さえることができる」とした。ジプシーに、「放火があればそのたびに少なくとも10人のジプシーを絞首刑にする。しかもジプシーがそこにいたかどうかの調査なしでそうする」と始めにはっきり明言しておけばいいのだ。そうすればジプシーの中から最良のゲットー消防隊を手に入れることになろう、というのである[78]。

最後に、ヴェンツキについて思想行動調査を命じる。「『見事な』報告書をまとめたヴェンツキはいったい何者か、と。古参の国民社会主義者だとは思えない。なぜなら、「ライヒの利益ために」命令が下るとき、古参党員なら、異議だけを申し立てることなどありえないと。そして、結びとして、「県知事であり親衛隊指導者として」のユーベルヘーアに対し、ライヒのためにぜひとも必要で、リッツマンシュタットにとっては疑いもなく大きな負担となる措置の遂行を完璧に実現するよう、これまで高く評価してきたエネルギーと実行力を、従来同様に投入するよう「お願い」した。ヒムラーが署名し、追伸として、コピーをハイドリヒ

に送付することを付言していた[79]。また、ユーベルヘーアの上司ガウライター・グライザーにもコピーを送付した[80]。

ヒムラー、ハイドリヒに現地ゲットーの事情が伝わっていないとの危惧を抱いたリッツマンシュタット県知事・親衛隊少将ユーベルヘーアは、1941年10月9日、総統大本営のヒムラー宛てに、10月4日付報告に対する追加説明をA4タイプ用紙3枚にもなる長文の電報で送った。それは、ユーベルヘーアが10月7日に「個人的に確認したこと」を訴えるためだった。彼によれば、この問題の担当者ライヒ保安本部のアイヒマン親衛隊少佐とリッツマンシュタット国家警察支部のユダヤ人問題担当者は、9月29日に開かれた関係者会議で「虚偽のデータによってライヒ内務省の代表の同意を得た」のだった。ユーベルヘーアは、「そのことから推測して」、ヒムラーもまた正しい報告を受けていないのではないかと考え、注進に及んだわけである[81]。

ユーベルヘーアは、アイヒマンの説明と自分の見地を対比させる。まず第一に、アイヒマンはリッツマンシュタットでユーベルヘーアと移送措置の実行について話し合ったとしている。しかし、「実際には」、アイヒマンはユーベルヘーアには「何も伝えなかった」。アイヒマンは、ゲットーの総指揮がユーベルヘーアの掌中にあること、ユーベルヘーアのみがゲットーの全体像をつかんでいることを知っていたはずなのに、「何も伝えなかった」。第二に、アイヒマンは、ゲットーの経済問題責任者は受入割り当てに「明確に同意」したといっている。しかし、経済問題以外で「たいして重要でもないこの人物」、すなわちヴェンツキは、「そのような表明を与えたことはないと断固として主張」している。しかも彼にはそもそもそのような表明を行うことなどできない。なぜなら、彼ヴェンツキは、リッツマンシュタットの受け入れ不可能な実態を詳細にまとめた「当の人物だから」である。リッツマンシュタット国家警察支部長シェーフェ博士も、アイヒマンのいったことが事実ではないと非難している。第三に、アイヒマンは「数日来、ゲットーの編成替えが始まった」とし、それは国防軍注文の充足確保を第一の目的にしたものだとしている。アイヒマンはさらに次のように説明している。すなわち、ゲットーは労働ゲットーと扶養ゲットーに「分割された」。労働ゲットーには約4万人のユダヤ人が国防軍注文の仕事のために住むことになる。扶養ゲットーにはその他のすべてのユダヤ人が住むことになる。労働ゲットーと扶養ゲットーは、塩化石灰帯、堀、垣、監視隊によって「厳格に隔離されることになる」。したがって、ゲットーの将来的組織からすれば、国防軍注文の充足はこれまで以上に達成されることなる、と。しかし、ユーベルヘーアからすれば、こうしたアイヒマン

の説明は誤りだった。労働ゲットーと扶養ゲットーとの分離は、「実際には実現できない」というべきだった。なぜなら、国防軍の注文に応じている工場や作業場は、現在のゲットーの「全域に散らばっている」からだった。仮に、こうした経営をゲシュタポによって扶養ゲットーと指定された地域から移転することができたとしても、非労働ユダヤ人をすでに人口稠密な当該地域に割り当てることは、「不可能」だった。なぜなら、扶養ゲットー地域はわずかに0.748平方キロしかないのに、労働ゲットーとされた空間は3.162平方キロにも達しているからだった。両地域の間にある空間はそもそも設定されていなかった。また、そのような空間を捻出することもできなかった。なぜなら、両地域は「主要道路で分離されているから」だった。主要道路上の市電と馬車輸送により都市街区間の連結は維持されなければならなかった。いずれにしろ、分離のための準備はこれまで「行うことができなかったし、遂行できないだろう」というのがユーベルヘーアの立場だった[82]。

次にリッツマンシュタット国家警察支部のユダヤ人担当官の説明に対するユーベルヘーアの実情説明である。国家警察担当官は、「2万5000人のユダヤ人増加」でも伝染病の危険は増えないとした。伝染病の危険はゲットーに住むユダヤ人の「大幅減少によって」少なくなった。春にはゲットーにまだ18万5000人が住んでいたが、現在では12万人に減っている。だからライヒからの移入を加えても、ゲットー人口は「約14万5000人になるだけ」という。しかし、そうした説明はユーベルヘーアからすれば、誤りだった。ユーベルヘーアにシェーフェ博士が9月29日に文書報告したところによれば、「正しくは、ゲットー閉鎖後、ゲットーにいたのは16万人であり、今日なお約14万5000人がゲットー内で生活している」のだった。したがって、9月29日の会議でリッツマンシュタット国家警察のユダヤ人問題担当官が示したデータは、「意識的に誤解を招くもの」に他ならなかった。ユダヤ人問題担当官は、ゲットーの住宅空間が都市清掃の過程で、また当初は住居空間として使われていた工場や作業場の操業再開で、減少してしまったことを知っていたはずにもかかわらず、会議では「そのことを黙っていた」。彼が、現在のゲットー人口の正確な数字14万5000人を示し、問題のユダヤ人とジプシーの移入後は17万人になること、したがって40年3月30日のゲットー閉鎖時点[83]よりも1万人以上も人口が増えることがわかれば、「内務省は伝染病の危険のために、同意はしなかっただろう」とユーベルヘーアは判断する。しかも、旧ライヒのユダヤ人は、若いときに罹病して免疫ができている当地のユダヤ人と違って、体内に何の抗体も持っておらず、彼らが大量感染すればリッツマンシュタット市のド

イツ人をきわめて危険にさらす。それだけ「なおさら危険」なのだった。ユーベルヘーアからすれば、アイヒマンとリッツマンシュタット国家警察支部担当官のやり方は、「ジプシーのこすっからいやり方」に他ならなかった。だから、彼は「二人に申し開きを求めなければならない」とヒムラーに訴えたのである。結論的に、旧ライヒのユダヤ人、そしてとりわけジプシーを戦時経済のために全速力で働いているリッツマンシュタット・ゲットーに割り当てるなら、「責任を負えない」と強調した。そして、『ベルリン絵入新聞』の最近号によれば、ワルシャワ・ゲットーには、「まだダンスのできるキャバレーやバーがある」のだから、容易に2万人のユダヤ人と5000人のジプシーを受け入れることができようと提案した。ワルシャワ・ゲットーなら戦時経済のために働いていないし、割り当てによって戦時ポテンシャルを危険にさらすこともないと申し立てた[84]。だが、ワルシャワ・ゲットーの実情をユーベルヘーアは本当に知っていたのだろうか？彼の情報源『ベルリン絵入新聞』は、宣伝用の新聞ではないか。公然たる宣伝用新聞がどこまでゲットーの実態を知らせるものか。

この長文電報を読んだヒムラーは激怒した。彼からすれば、内容全体の「調子が無作法」で、彼の命令を否定するものだった。とりわけ怒りの矛先を向けたのは、アイヒマンとリッツマンシュタット国家警察支部ユダヤ人問題担当官のような「親衛隊同志」を「ジプシーみたいな、こすっからい商人のようなやり方」という表現で非難した点だった。ユーベルヘーアがライヒのほかの官庁にも「同じような電報を送り付けるかもしれない」と懸念した。そこで、ヒムラーは親衛隊ライヒ指導者・ドイツ警察長官として、「そのような調子を決して許さない」旨、ユーベルヘーアにはっきり肝に命じさせておかなければならなかった。「党同志ユーベルヘーアの数値データについても疑問だ」とした。なぜなら、ユーベルヘーアは、ライヒからユダヤ人を排除してしまわなければならないという「全体的問題をなんにも理解していないからであり、たんにリッツマンシュタットの利益のみ守ろうとしているから」だった[85]。

ヒムラーはもちろん、ユーベルヘーアにも直接電報を打っていた。その文面はユーベルヘーアを心底震え上がらせただろう。ヒムラーはいう。「貴様の1941年10月9日の電報をもう一度読んでみなさい。貴様は物の言い方をまったく間違っており、上司に向かって書いていることを明らかに失念している」と。そして、リッツマンシュタットと県がドイツ・ライヒに属していること、「まず第一にライヒの利益」が優先され、その次に初めて県のことが問題になるのだということを「思い起こすことを薦める」と恫喝した。この問題が片付くまで、「今後君か

らの電報や手紙を送り返すように命じておいた」[86]という。つまり、問答無用、命令を遵守、遂行せよ、である。そして、グライザーにはこのユーベルヘーア宛ての電報も付属資料として添付した。ハイドリヒにも、グライザー宛て書簡、ユーベルヘーア宛て電報のコピーを「速達で」送付した。直接間接に締め上げたわけである。ハイドリヒには、アイヒマンとリッツマンシュタット国家警察支部ユダヤ人問題担当官のいずれかが「何か誤った行為をしたかどうか」の調査を命じたが、ユーベルヘーアの態度と口調が「気に食わない」ことは確実だと伝えた[87]。

ところが、国防軍最高司令部の防衛経済軍需局長トーマス将軍から親衛隊ライヒ指導者・ライヒ内務省ドイツ警察長官ヒムラーに宛てて、1941年10月11日付の速達が送付された。そのテーマは、「2万人のユダヤ人と5000人のジプシーの追加割り当てによるリッツマンシュタット・ゲットーの戦時重要物資衣料・軍需品製造の撹乱」であった。トーマス局長によれば、リッツマンシュタット・ゲットー管理局長から10月中旬に「西部の空襲危険地域から」ユダヤ人とジプシーが送り込まれてくることが伝えられた。ゲットー管理当局は、当然のことながらヒムラーに伝えたと同じことをトーマスに伝えていた。すなわち、一年半の「ものすごい困難」を克服して打ち立てた軍需関係の工場、作業場を「明け渡さなければならない」と報告したのである[88]。

その情報どおりなら、第一には軍需品製造が「ほぼ不可能になる」し、第二に同じ軍需品をライヒの内部で処理するためには、すでに非常に厳しい労働配置状態にもかかわらず、「約4万人の労働者」を割かなければならなくなる。しかも、ユダヤ人労働力は利用しないことになる。さらに第三に、すでに工場・作業場に運び込まれた約5000万ないし6000万ライヒスマルクの原料・半製品を、配給割り当てを受けた発注者に返却しなければならなくなる。それによってライヒ鉄道に相当な負担が発生することになる。トーマス局長は、このような反対理由を示して、「他のゲットー（たとえばワルシャワ）へ」の移送を検討するように申し出た。ことの緊急性を考慮して、「可及的速やかな決定」を希望した[89]。

これに対しヒムラーは直ちに返答した。追加的なユダヤ人の移入割り当ては、リッツマンシュタットの防衛経済の経営を撹乱するとの「あなたの危惧は、根拠がない」と。ヒムラーによれば、現地当局は、「残念ながら、持ち場の心地よさの観点で問題を見ているだけ」であった。ユダヤ人移送は「ライヒの利益」が要求していることであり、しかも、たんに「空襲の危険のため」ではなく、「根本的な考慮に基づくもの」であった。彼は、トーマスにユーベルヘーア宛ての厳命の内容を、すなわち、ゲットーのたくさんの家屋のなかにユダヤ人を住み込ませ

るように指示したことを伝えた。そのことによって防衛経済の経営が何ら影響を受けることはないとした。リッツマンシュタットのゲットーは最初20万人の住民がいたが、現在は約12万人であるから、十分余地があるとしたのである。そして、トーマスに危惧を訴えた現地当局は、軍の関係者に「不完全なことを知らせた」のであって、「きわめて不当」だったとした。ヒムラーのトーマスへの返書のコピーは、ガウライター・グライザー、その部下で問題のユーベルヘーアにも送付された[90]。こうしてウッチ・ゲットーへの移送は不可避となった。

実際に、ハイドリヒ、アイヒマンは、10月15日、ユダヤ人、ジプシーのウッチ・ゲットーへの移送を開始した。19日にハイドリヒが総統大本営のヒムラーに宛てた手紙によれば、毎日1000人輸送し、11月8日までの間に移送を完了するものとした。ヒムラーはトーマスからの異議申立て・ワルシャワ移送提案をハイドリヒには伝えていなかったようで、19日現在、ハイドリヒは、「ユーベルヘーアがこの件で国防軍最高司令部に陳情したかどうかはっきりとは確認できない」としていた。この時点でハイドリヒがヒムラーに伝えたのは、ユーベルヘーアに名誉を傷つけられたリッツマンシュタット国家警察支部長（シェーフェ博士）が、ユーベルヘーアに「今後はあなたを信頼できず、もはや協力したくない」と抗議したことだった[91]。

ハイドリヒ自身もユーベルヘーア宛てに電報を打っていた。その内容もヒムラーに伝えている。それによれば、「親衛隊ライヒ指導者とガウライター・グライザーの間で最大限綿密に打ち合わせてあった旧ライヒからのユダヤ人、ジプシー割り当てに関する親衛隊ライヒ指導者の命令に対する君の反対行動で、貴兄は一方ではこの措置実行のために進んでいる仕事を非常に困難にしただけでなく、さらにもっとゆゆしいことに、貴兄の態度で親衛隊へのしかるべき帰属感情が不足していることを白日の下にさらしてしまった」と難詰した。移送作戦を阻止することに成功しなかったからといって、「些細な副次的なことで私に直属する親衛隊指導者を攻撃するとは、まったく理解できない」と。すなわち、ハイドリヒはアイヒマンとシェーフェ博士を擁護し、「彼らは命令にしたがって行動しただけだ」といった。ユーベルヘーアに対し、今後の「貴兄とリッツマンシュタット国家警察支部長の協力継続に関し、直ちに私に態度表明をせよ」と命じた。その態度表明の如何によって、しかるべき結論を出すであろうと[92]。これは、ユーベルヘーアの面目まるつぶれの命令に他ならなかった。その精神的圧迫感と威圧感は大変なものだっただろう。

1941年10月28日、ヴァルテラント大管区長官グライザーがヒムラーに手紙を書

いた。それはユーベルヘーアをとりなすためのものだった。ユーベルヘーアは「最善のことを欲していた」のだが、言葉の使い方、調子を「いくぶん誤った」と弁護した。いまではヒムラーの命令、ヒムラーとグライザーの間の合意を摩擦無く遂行する気持ちになっているので、「どうか再び正真正銘の古参国民社会主義者とお考えいただくように」と[93]。

これに対しヒムラーは、1941年11月6日、グライザーに返事を出した。「よく分かっているように私は根に持つ方ではない」と。そして、ユーベルヘーアにウアラウプ（長期休暇）を与え、神経を休ませるように命じた。彼が回復して職務に復帰すれば、「私にとってはそれですべた片が付いている」。ただ、ライヒの建設がリッツマンシュタットの教会の塔よりも高いものだとの認識は彼がこの全体の突発的事件から学び取ったものと期待したい、と。そして、このグライザー宛ての書簡コピーをハイドリヒにも送った[94]。この穏やかな表現は何を意味するだろうか。

親衛隊幹部、古参国民社会主義者としてユーベルヘーアをしかるべく処遇することを可能にするのは、ウッチ・ゲットーの担当者とユーベルヘーアが提起した難問を現実に解決することである。「フューラーの希望」（その背後にある戦局転換、ライヒとヨーロッパ全域からの移送要求）、ウッチ・ゲットーの現実が提起する難問、絶対的重みのある国防軍の軍需経済的要請、親衛隊内での亀裂の修復と親衛隊の隊列の強化、これらをすべて一挙に実際に解決する方策は何か。ヒムラー、ハイドリヒにとって、問題はこのように提起されている。ヒムラー、ハイドリヒは、これに対する解答として、ガス自動車開発の進行を確認しつつ、「安楽死」抹殺作戦を選択した。その具体案をもってヒトラーに会い、ヒトラーの承認を得たのが10月25日のことだろう。同夜のヒトラーの発言を承認と激励の言葉として解釈しておきたい[95]。第一次世界大戦、すなわち「世界戦争で、この犯罪人種は200万人の死者に責任があり、いまやふたたび何十万もの死者に責任がある」と。そして、「われわれがユダヤ民族を根絶しようとしているという恐怖が先走るなら、それは結構だ」と[96]、ヒムラー、ハイドリヒに向かって語ったのである。さしあたりは、急場の「一時凌ぎ」の策だが、そこから「ユダヤ民族を根絶しようとしている」のではないかとの恐怖が先走ってもいいではないかと、間接的表現でヒムラー、ハイドリヒの提案を承認したと見て置きたい。ただし、その間接的表現が示すように、ヒトラーが承認し指示したのは、何月何日にどこでどれだけといった個別の作戦ではなく、基本的な作戦展開（すなわち、移送政策から労働不能者・労働不適格者の「安楽死」抹殺作戦への転換）であろう。

ヒムラー、ハイドリヒが、「一時凌ぎ」の策[97]として、そのような現実的解決策を選択決定したからこそ、またヒトラーの承認を得たからこそ、ユーベルヘーアに長期休暇を取らせることが可能になった。またヒムラーは「根に持たない」などという余裕のある態度を示すことができたとみなければならない。

さらには、現実問題がユダヤ人の「安楽死」抹殺によって親衛隊流自民族至上主義で解決できたからこそ、そしてその作戦遂行に長期休暇を終えたユーベルヘーアが実績をもって応えたからこそ、約8ヶ月後の1942年7月、ヒムラーはユーベルヘーアに誕生日祝いとして「親衛隊旗手」の磁器像を送ったのであろう。ひとたび難詰され面目失墜したものにとって、それは驚天動地の喜びだっただろう。すなわち、ユーベルヘーアの礼状（7月29日付）によれば、ヒムラーのこの誕生祝いと祝辞は、彼にとって「異常な喜び」だった。祝いの品と言葉は、「ドイツの東部の新建設に対するささやかな貢献を認めていただいた」しるしに他ならなかった。だから、ユーベルヘーアは、「将来も、あなたが提起される猛烈な課題、すなわちここ東部におけるドイツ民族の安全と強化の課題の解決にあたって、全力であなたを支えるでありましょう」と忠誠を誓うのだった[98]。

ユーベルヘーアの上司グライザーは、その3ヶ月ほど以前に、「ライヒの利益」、「ドイツ民族の安全と強化のため」、ユダヤ人抹殺作戦完了後の提案さえもヒムラーに対して行っていた。ヴァルテラント大管区内の「約10万人[99]のユダヤ人特別処理作戦は、ここ2－3ヶ月で終えることができる」ので、次の作戦として、ドイツ民族にとって非常な危険となっているポーランド人重症結核患者を「根絶する」ことを提案した。彼はヒムラーに、ヴァルテラントのポーランド人結核感染者約23万人のうち、重症者3万5000人を「ユダヤ人特別作戦」のスタッフと設備で「根絶する」許可を求め、その準備を進めようとしたのである[100]。

ウッチ・ゲットー問題を契機として、1941年10月後半に「一時凌ぎ」として選択された「安楽死」抹殺作戦は、1942年5月までには「約10万人のユダヤ人特別作戦」に、すなわち、ウッチ・ゲットーの非労働人口のほぼすべてを抹殺する作戦に突き進んでいる[101]。そして、その後には、ポーランド人重病結核患者の「安楽死」抹殺作戦さえも、構想されるにいたっていたのである。この間の急進化の論理は、「冬の危機」、世界大戦化、スターリングラードを始めとする夏の攻撃準備とこれに抗する占領下の諸勢力の闘いと連関してみていく必要があろう。

いまここでは、ウッチ・ゲットーに移送された2万5000人の運命とウッチ・ゲットーのユダヤ人（ヴァルテガウ各地からウッチに集められたポーランドユダヤ人）に関して見ておこう。ヴィッテによれば、ライヒとプロテクトラートから

ウッチ・ゲットーに移送されたユダヤ人の過半数は、年配の男女で、彼らの多くが異常に厳しかった1941年－42年の冬を生き延びることができなかった。1942年４月末までに3186人、移送されたものの16％が悲惨な窮乏で死んだ。移送グループの中でもっとも年齢の高かったベルリンからのユダヤ人の20％以上が、この期間に死亡した。ゲットーで何かの仕事を見つけることができたのはほんのわずかのものだけだった。大部分は労働不適確か、ナチスによってそうだと断定されていた[102]。

ウッチ・ゲットーからヘウムノへの最初の移送は、1941年12月５日であり、ガス自動車による実験的「安楽死」殺は8日だった[103]。ウッチ・ゲットー住民の抹殺は、1942年１月、4600人のジプシー（ロマ）の抹殺ではじまった。それに続いて、あわせて45,000人のポーランドユダヤ人が1942年１月中頃から４月初めまでに殺された。彼らに続いて、同年４月から５月にかけて、ライヒとプロテクトラートから移送されていたユダヤ人のうち少なくとも約１万人がヘウムノでガス自動車によって殺された[104]。ヒムラーがその決定を下したのは、４月17日の朝だった。この命令に基づくヘウムノへの移送第一列車は、1,008人の男女子どもを乗せて５月４日、ウッチを出発した。５月15日までに、主としてドイツ、オーストリア、チェコ、ルクセンブルクのユダヤ人10,993人が移送され、ヘウムノでガス殺された。ヒムラーはヒトラー誕生日（４月20日）に間に合うように総統大本営に帰還した。彼は４月20日、ハイドリヒと長時間電話で話した。ハイドリヒもまた視察旅行をしてきていた。ヒムラーはハイドリヒにガウライター・グライザーを訪問したこと、そこで彼に与えた命令についてハイドリヒに教えた。会話のテーマについて記録した業務日程表には、「ジプシーの抹殺は無し」となっていた[105]。ウッチ・ゲットーに移送されたジプシーの抹殺は既に終わっていたということであろう。ハイドリヒとの電話の後、ヒムラーはヒトラーに誕生日プレゼントを手渡しに出向いた[106]。

おわりに

さきにみたとおり、ワルシャワ・ゲットーに「まだダンスのできるキャバレーやバーがある」というのは、ウッチ・ゲットー責任者がユダヤ受け入れ回避のために使った口実のひとつだった。しかし、宣伝用の局部的な新聞写真がワルシャワ・ゲットーの全体の実態を示すものでないことは言うまでもない。では、1941年９月－10月、現実のワルシャワ・ゲットーはどんな状態だったか。そもそもワ

ルシャワを含む総督府全体のユダヤ人の状態は、ドイツ編入地域に位置するリッツマンシュタット(ウッチ) より不利な諸条件下にあったことは間違いない。後にラインハルト作戦と称される総督府ユダヤ人の抹殺への諸要因が，ソ連占領地の窮状と重なり合いつつ蓄積してきていたことは容易に想像されるところである。しかし紙数が尽きた。ラインハルト作戦への道の検証は、別稿で行いたい。

(注)

1 拙著『ドイツ第三帝国のソ連占領政策と民衆 1941－1942』同文舘、1994年。同「独ソ戦の展開・世界大戦化とホロコーストの力学」『横浜市立大学紀要』社会科学系列、第1号、1998年など。「国防軍の犯罪」も、戦局の展開、占領地のさまざまの抵抗と関連してみなければならない。国防軍の「神話化」批判、「国防軍犯罪」展をめぐる時事的論争については、木戸衛一「ドイツにおける『国防軍論争』」『戦争責任研究』第18号(1997年冬季号)、中田潤「ドイツ国防軍と『ユダヤ人問題』－独ソ戦に関しての歴史認識をめぐって－」『歴史評論』581号、1998年9月、原信芳「ドイツ抵抗運動に関する最近の研究動向」三田史学会編『史学』第67間第3・4号、1998年などを参照されたい。

2 Rezension Jürgen Zaruskys über Herbert (Hrsg.) (1998), "Ganz normale Profiteuere. NS-Vernichtungspolitik: ein Taschenbuch und eine Ringvorlesung zum neuesten Forschungsstand. [http://www.sueddeutsche.de/cgi-bin/…/19980921/polit_o.htm&date=19980921]

3 ホロコースト・エンサイクロペディアの編者として有名な世界的研究者イェフダ・バウアーは、ゴールドハーゲンに同意を公的に表明したただひとりの歴史家も知らないとしている。専門家の誰ひとり同意しないということは、「非常にまれな満場一致である」と。そして彼もまた自分の大学では、この本は決してPh. D論文として合格しないだろうとしている。Dominique Vidal, From "Mein Kampf" to Auschwitz [http://www.monde-diplomatique.fr/en/1998/10/14vidal.html]

4 Ulrich Herbert (Hrsg.), *Nationalsozialistische Vernichtungspolitik 1939-1945. Neue Forschungeen und Kontroversen*, Frankfurt a. M. 1998, S.10.

5 1997年度のドイツ歴史家大会のゴールドハーゲン論争に関する緊急特別セッションの発言者の圧倒的多数は、専門研究者ではなく、「学生ないし学校教員」だったようである。中田潤「ドイツ国防軍と『ユダヤ人問題』－独ソ戦に関しての歴史認識をめぐって－」『歴史評論』1997年9月号、77ページ、注 (12)。

6 いうまでもなくブラウニングが、ゴールドハーゲンに先んじてハンブルク出身の警察予備大隊101の戦後裁判資料を掘り起こし、ドイツ外務省ユダヤ人問題担当官、ライヒ保安本部でガス自動車を案出・製造した技術者、占領地セルビアの軍政当局・治安警察の要員、ゲットー要員、ポーランド健康保険局官吏などに着目し、開拓的な仕事をしたことは高く評価されるべきことである。ただ、警察予備部隊の隊員の心理・態

度の細部に分け入ったメリット（その点での単一原因論者ゴールドハーゲンに対する優位性）は認めつつ、全体としての警察特別部隊がなぜ数十万から100万人ものユダヤ人を殺戮し得たかの説明においては、問題提起のレヴェルにとどまっているのが問題であろう。その問題提起を誤った観念論的単一原因論（特殊ドイツ的に強烈な「排除的」「絶滅的」反ユダヤ主義）で解いて見せたのが、ゴールドハーゲンということになろう。ブラウニングの最新のゴールドハーゲンへの反論は、Christopher R. Browning, Die Debatte über die Täter des Holocaust, in: Herbert(Hrsg.) (1998), S. 148-169.

7 個々の歴史問題を具体的な「経済、社会、政治、文化的諸要因のかみ合い(ineinandergreifen)」において解きほぐす方法的見地の有効性は、時代を問わない。たとえば、この方法的見地による歴史叙述の優れた最近の事例として、ドイツ第二帝政期、文化闘争時代の「ドイツ・ルルド（カトリック巡礼地)、マルピンゲンの台頭と没落」を描いた David Blackbourn, *Wenn ihr sie wieder seht, fragt wer sie sei. Marienerscheinungen in Marpingen - Aufstieg und Niedergang des deutschen Lourdes*, Übers. v. Holger Fliessbach, Reinbek b. Hamburg 1997. Rezension Goschlers für H-SOZ-U-KULT@H-NET.MSU.EDU, 13.09.98. 他方で、ゴールドハーゲン流の単一原因的歴史叙述も一つの潮流を形成している。James M. Glass, *"Life Unworthy of Life": Racial Phobia and Mass Murder in Hitler's Germany*, New York 1997. Review for H-German by Richard Weikart, in: H-German@h-net. msu. edu (September, 1998) この場合は、「ドイツ社会の人種恐怖症」なるものにホロコーストの原因を求める。しかし「人種恐怖症」はアメリカ社会、その他、世界各地にみられる。それがどのような諸要因と結びついたときホロコーストをもたらすのか、他の諸要因との多元的連関性をこそ解明しなければならない。ホロコースト研究の歴史を総括したヘルベルトの結論も、ここにある。「犯人」に関していえば、その多層性、競争、野心、利害関心、瑣末主義、残虐さとビーダーマイヤー的外見的モラルの絡み合い、政治的ユートピアと似非科学的世界理論の重なり合いを具体的実証的に見ていかなければならない。Herbert(Hrsg.) (1998), S. 66. ただその場合、細部に紛れ込んでしまわないために、ホロコースト現象が発生した独ソ戦の展開とヨーロッパ戦争の世界大戦化の大局的力学が、多様な諸要因を整理秩序付ける導きの糸となるだろうというのが拙稿の方法的立場である。拙著『ソ連占領政策』への書評は、この根本的方法に無理解である。

8 『横浜市立大学論叢』第49巻 社会科学系列 第1号。「実行犯」の「動機」に関しても、まだまだ未解明の部分は多い。親衛隊員の妻について最近の研究は、その穴を一つ埋めた。1931年から1945年までに親衛隊員と結婚した女性は約24万人である。「ドイツ民族の人種的上層部」として、ヨーロッパの将来の権力機構エリートを形成する「氏族共同体」のメンバーに選び抜かれたのが、この女性たちだった。彼女たちが政治的、社会的、人種的基準をクリアして親衛隊員の妻に選ばれ、そのイデオロギーにおいて、また「大量虐殺」において、夫を支えたことも、「実行犯」の「動機」を考える上で見逃せない点である。これを解明した最近の研究、Gudrun Schwarz, *Eine Frau an seiner Seite. Ehefrauen in der 'SS-Sippengemeinschaft'*, Hamburg 1997.

9 Ralf Ogorreck, *Die Einsatzgruppen und die "Genesis der Endlösung"*, Berlin 1996.

10 Ibid., S.215.

11 ナチス台頭において、民衆の総動員による総力戦としての第一次世界大戦がもたらしたポピュリズムの重要性、民衆のなかに浸透した「民族共同体」意識（国民の諸階級・諸階層間の隔壁・格差を貫く「民族」としての一体感の喚起）、そこでの「民族的連帯と犠牲の共同体の強調と生産主義、拡張主義、よりよき生活への潜在的消費主義の融合」を浮かび上がらせた次の研究も、ホロコーストを支える多元的要因の重要な一因を剔抉したものといえよう。Peter Fritzsch, *Germans into Nazis*, Cambridge, Mass. / London, 1998. Review for H-German by Shelley Baranowski, in: H-German@h-net. msu. edu (September, 1998). しかも、そのような意識構造はドイツ社会の中にまんべんなく広がっていたのではなく、特別の世代において純粋型的に凝集していた。ライヒ保安本部の若きエリートがそれであり、ヘルベルトの研究『ベスト 1903－1989 －急進主義、世界観と理性についての伝記的研究』はそれを明らかにした。Ulrich Herbert, *Best. Biographische Studien über Radikalismus, Weltanschauung und Vernunft, 1903-1989*, Bonn 1996. アウシュヴィッツ収容所長官ルドルフ・ヘース（Rudolf Höss）もまたそのような民族主義世代の一人だった。Karin Orth, Rudolf Höss und die 》Endlösung der Judenfrage《. Drei Argumente gegen deren Datierung auf den Sommer 1941, *Werkstatt Geschichte*, 18(1997), S. 45-57. 拙稿「ホロコーストのダイナミズム－「絶滅命令」に関する史料批判と史料発掘の意義－」日本ドイツ学会『ドイツ研究』第26号、1998年6月。

12 *Kriegstagebuch des Oberkommandos der Wehrmacht (Wehrmachtsführungsstab)* [= KTB] 1940-1945, hrsg. v. Percy Ernst Schramm, München 1982, Bd. 1, S. 340f.

13 Ibid., S.341f.

14 Ogorreck (1996), S.25f.

15 Ibid., S.43.

16 Ibid., S. 218.

17 KTB, Bd.I, S.1220f.

18 *Die Wehrmachtberichte 1939-1945*, München 1985, Bd. 1, S. 637.

19 KTB, Bd.I, S. 565.

20 KTB, Bd.I, S. 1221f.

21 Heinz Boberach (Hrsg.), *Meldungen aus dem Reich. Die geheimen Lageberichte des Sicherheitsdienstes der SS 1938-1945*, Herrsching 1984, Bd. 7, S. 2618.

22 Meldungen aus dem Reich (Nr. 212), 18. August 1941, in: Boberach (1984), Bd. 8, S. 2660.

23 Meldungen aus dem Reich (Nr. 209), 7. August 1941, in: Boberach (1984), Bd. 7, S. 2618.

24 Boberach (1984), Bd. 8, S. 2660.

25 Ibid., S. 2659.

26 拙稿「ユダヤ人東方移送政策とウッチ・ゲットー問題」『横浜市立大学論叢』第49巻社会科学系列 第1号の「事件通報・ソ連」紹介部分を参照されたい。なお、アインザッツグルッペに関する本格的開拓的研究書 Helmut Krausnick / Hans-Heirich Wilhelm, *Die Truppen des Weltanschaunngskrieges. Die Einsatzgruppen der Sicherheitspolizei und des SD 1938-1942*, Stuttgart 1981 には、「事件通報・ソ連」からの豊富な抜粋が証拠ドキュメントとして掲載されている。

27 Ogorreck (1996), S. 220. ベーアは、バッハ-ゼレウスキーの業務日誌、ロシア人女医の証言などをもとに、ヒムラーは15日16日にミンスクとバラノヴィッチを視察し、15日に射殺を見たとしている。Mathias Beer, Die Entwicklung der Gaswagen beim Mord an den Juden, *Vierteljahrshefte für Zeitgeschichte* 35 (1987), S. 407. なお、この全ユダヤ人無差別殺戮命令を「ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅命令」と混同しないために注意を喚起しておけば、ここで問題になっているのは、あくまでもソ連占領地域のユダヤ人だということである。命じる対象がソ連占領地に投入したアインザッツグルッペである以上、当然であろう。高まるソ連の軍事的政治的抵抗圧力を思うように抑圧撃滅できない憤懣のはけ口と治安秩序確立の手段として、ヒムラーはこの政策飛躍を選択したと見ておきたい。

28 Karte Europas Anfang Dezember 1941, in: *Das Deutsche Reich und der Zweite Weltkrieg*, Bd.4: Der Angriff auf die Sowjetunion, Stuttgart 1983, Rückseite des Deckels. 前掲拙著、図0－1。

29 Beer (1987), S. 407.

30 Ibid., S. 410.

31 Ogorreck (1996), S. 220.

32 Beer (1987), S. 407.

33 Ibid., S. 405.

34 刑事犯罪技術研究所の研究員ヴィトマン博士によれば、ソ連占領地で使われるようになる排気ガス利用の特殊自動車の製造は、対ソ戦「開始直前に」彼の上司ヘースHeess博士とはじめて話題にしたことになっている。Eugen Kogon / Hermann Langbein / Adalbert Rueckerl (Hrsg.), *Nationalsozialistische Massentötungen durch Giftgas*, Frankfurt a. M. 1986, S. 63. しかし、これはガス自動車使用の実際を知った後のこと、しかも戦後裁判での証言（1960年）であり、本文中で述べたヒムラーのネーベへの依頼の日時からしても、排気ガス利用の特殊自動車が対ソ戦開始前に検討されていたというのは早すぎる。Beer (1987), S. 407, S.409.

35 同時代のドキュメントでは、一酸化炭素（排気ガス）を密閉した箱型荷台に注入して閉じ込めた人間を中毒死させるガス自動車のことを、「特殊自動車(Sonder-Wagen)」、「特殊乗り物（Sonderfahrzeuge)」、「S－自動車（S-Wagen)」と隠語で表記していた。Beer (1987), S. 403.

36 Ibid., S. 405.

37 Kogon u. a. (1986), S. 63-65.

38 Beer (1987), S. 406.

39 Ibid., S. 408f.

40 Joseph Goebbels, *Tagebücher*, hrsg. v. R. G. Reuth, München 1992, S. 1678.

41 Schreiben Wagners vom 17.11.41, in: Leon Poliakov / Josef Wulf, *Das Dritte Reich und die Juden*, München 1978, S. 454.

42 Befehl Reichenaus vom 10. 10. 41, in: Ibid., S. 454f.

43 Goebbels, *Tagebücher*, S. 1687f.

44 さしあたり、拙稿「ユダヤ人東方移送政策とウッチ・ゲットー問題」『横浜市立大学論叢』第49巻 社会科学系列 第1号, 1998年3月を参照されたい。

45 Goebbels, *Tagebücher*, S. 1689f.

46 Ibid., S.1691.

47 http://www.nobel.se/announcement-98/economics98.html. アマルティア・セン「社会的コミットメントとしての個人の自由」川本隆史訳『みすず』1991年1月。

48 Goebbels, *Tagebücher*, S. 1690f.

49 Ibid., S. 1691.

50 Ibid., S. 1694.

51 Ibid., S. 1694f.

52 Ibib., S. 1695f. このヴィルナ・ゲットーの深刻な状況については、「最終解決の実行」との関連で、次にも紹介がある。南利明『ナチス・ドイツの社会と国家－民族共同体の形成と展開-』勁草書房、1998年、477ページ。

53 Beer (1987), S. 410f.

54 Ibid., S. 412f.

55 Kogon u. a. (1986), S. 93.

56 ヘウムノについて詳しくは、Ibid., S.110－145.

57 Beer (1987), S. 412f.

58 Ibid., S. 414f.

59 Ibid., S. 415.

60 Kogon u. a. (1986), S. 87.

61 拙稿「ユダヤ人東方移送政策とウッチ・ゲットー問題」『横浜市立大学論叢』第49巻 社会科学系列 第1号を参照されたい。

62 Peter Witte, Two Decisions concerning the "Final Solution to the Jewish Question": Deportations to Lodz and Mass Murder in Chelmno, *Holocaust and Genocide Studies*, Vol. 9, No. 3, 1995, p. 324ff.

63 Ibid., p. 326.

64 Ibid.

65 Ereignismeldung UdSSR Nr. 77, 8. September 1941, in: BA R 58 / 216.

66 Ereignismeldung UdSSR Nr.47, 9. August 1941, in: BA R 58 / 215.

67 前掲拙稿「ユダヤ人東方移送政策とウッチ・ゲットー問題」

68 Witte (1995), p. 327.

69 Schreiben Dr. Carltheo Zeitschels an den Einsatzstab Rosenberg, August 1941, in: Claudia Steur, *Theodor Dannecker. Ein Funktionär der "Endlösung"*, Essen 1997, S. 189.

70 Ibid., S. 190.

71 Witte (1995), p. 328.

72 Ibid.

73 Fernschreiben Heydrichs an Himmler, 8. Okt. 1941, in: BA NS 19 / 2655.

74 Ibid.

75 Fernschreiben Brandts an Heydrich, 8. Okt. 1941, in: BA NS 19 / 2655.

76 Schreiben Himmlers an Uebelhoer, 10. Okt. 1941, in: Ibid.

77 Ibid.

78 Ibid.

79 Ibid.

80 Schreiben Himmlers an Greiser, 10. Okt. 1941, in: BA NS 19 / 2655.

81 Fernschreiben Uebelhoers an Himmler, 9. Okt. 1941, in: Ibid.

82 Ibid.

83 ヴェンツキ報告では、「ゲットー閉鎖（1940年5月）時点で、人口16万400人」となっている。Bericht Ventzkis an den Regierungspräsidenten, 24. Sept. 1941, in: BA NS 19 / 2655.

84 Fernschreiben Uebelhoers an Himmler, 9. Okt. 1941, in: Ibid.

85 Schreiben Himmlers an Greiser, 11. Okt. 1941, in: Ibid.

86 Ibid.

87 Ibid.

88 Schnellbrief des Chefs des Wehrwirtschafts- u. Rüstungsamts, Oberkommando der Wehrmacht, an Himmler, 11. Okt. 1941, in: Ibid.

89 Ibid.

90 Schreiben Himmlers an Thomas, in: Ibid. 書簡の日付部分は判読できない。前後関係からして、また、ファイルの前後文書からして、トーマスの手紙の直後であることは間違いない。

91 Schnellbrief Heydrichs an Himmler, 19. Okt. 1941, in: Ibid.

92 Ibid.

93 Schreiben Greisers an Himmler, 28. Okt. 1941, in: Ibid.

94 Schreiben Himmlers an Greiser, 6. Nov. 1941, in: Ibid.

95 この拙論の立場は、ヘウムノに絶滅収容所を設立するグライザーの熱望が「9月、ないしは10月初め」とみるポールの説とも対立する。ポールはさらに「同じ時に、他の二つの場所にヨーロッパ・ユダヤ人の殺害の基礎を創出しようとしたように思える」としている。しかし、この点でも、絶滅政策への転換を早くとも10月下旬以降とみる拙論とは、見方が違う。Dieter Pohl, *Von der "Judenpolitik" zum Judenmord. Der Distrikt*

Lublin des Generalgouvernements 1939-1944, Frankfurt a. M. 1993, S. 99.

96 Hitler, *Monologe*, S. 106, 前掲邦訳『ヒトラーのテーブルトーク』(上)、145ページ。ただし、本文中の翻訳は引用者による。

97 Wannsee-Protokoll, in: Poliakov / Wulf (1978), S. 121.

98 Schreiben Friedrich Uebelhoers an Himmler, 29. 7. 1942, in: BA NS 19 / 2655.

99 ゲットー住民数に関し、ウッチ・ゲットー当局とウッチ・ゲシュタポ当局の統計とでは違うが、仮にヒムラーがトーマスに示した41年10月中旬時点での約12万人をゲットー住民数とすれば、これに2万5000人が加えられて、14万5000人になる。このうち約10万人が「特別処理」され、軍需関係の仕事に携わる「4万人ほど」(Bericht Ventzkis an den Regierungspräsidenten, 24. Sept. 1941, in: NS 19 / 2655, S. 5) のみがさしあたり生き延びたことになる。

100 Schreiben Greisers an Himmler, 1. Mai 1942, in: BA R 58 / 3517.

101 ヴァルテガウの45町村からウッチ・ゲットーに移送されたユダヤ人とライヒ、プロテクトラートからウッチ・ゲットーに移送されたユダヤ人が、ヘウムノに移送された時期(したがって「安楽死」抹殺された時期)にかんしては、次のようであった。1942年1月16日から1月29日、10,003人、2月22日から4月2日、34,073人、5月4日から5月15日、11,680人、それから約3ヶ月おいて9月5日から12日、15,859人。Kogon / Langbein / Rückerl (Hrsg.) (1986), S. 132. これらを合計すると、71,615人となる。ジプシーの約5000人、さらにヴァルテガウのさまざまの強制労働に酷使されていたもの約15,000人のガス殺 (Ibid.) を加えると、まさにグライザーのいう「約10万人」に近くなる。

102 Witte (1995), p. 333f.

103 Kogon / Langbein / Rückerl (Hrsg.) (1986), S. 120.

104 Witte (1995), p. 334.

105 Ibid., p.336.

106 Ibid.

【付記】 本稿作成にあたっては、1998年度横浜市立大学海外短期出張費による助成を得た。

横浜市立大学紀要委員

委員長　古平　隆

委　員　島田　茂　立木智子　潘　阿憲　松井道昭
川幡政道　毛里和子　山田俊治
蟻川謙太郎　大阿久俊則　大関泰裕　谷嶋二三男

（著　者）	（所属・職名）
永岑三千輝	商学部教授
佐々木圭吾	商学部助教授
中條祐介	商学部助教授
島田　茂	商学部教授

横浜市立大学紀要　社会科学系列　第2号

1999年3月15日　印刷　　発行者　横浜市立大学
1999年3月20日　発行　　横浜市金沢区瀬戸22-2
印刷所　内村印刷株式会社
横浜市中区末吉町1-12

横浜市広報印刷物登録番号082005号
類別・分類　A-MA070

THE JOURNAL OF YOKOHAMA CITY UNIVERSITY

Social Science No. 2

Deportations of Jews to Lodz and the Beginning of Mass Murder in Chelmno — Michiteru Nagamine ·· 1

CAD/CAM system and design skill — Keigo Sasaki ····· 33

An Analysis of the Dividend Policy and Accounting Policy Decision — Yusuke Nakajo ····· 57

Decentralization and River Management — Shigeru Shimada ····· 75

Yokohama City University